

椿利用

思フニ、菊ノ椿ノト云モノ、人ノ數奇ニヨリテ數多ニナルモノトミエタリ、一々漢名アルベカラズト仰ラル、

〔延喜式^{十三}太^{十三}舍^{十三}人^{十三}〕凡正月上卯日供進御杖、略頭進奏曰、大舍人寮申正月^能上卯日^能御杖仕奉^氏進

止^真申給^登波^久申、勅曰、置之屬以上共稱唯、隨次相轉置案上、畢即退出、其杖曾波木二束、比比良木棗

毛保許桃梅各六束、已上二束、株爲束、椿十六束、皮椿四束、黒木八束、已上四束、中宮、比比良木棗毛保許桃梅各

二束、燒椿皮椿各五束、但奉儀見

〔萬葉集^{十二}古今^{十二}相聞^{十二}往來^{十二}歌^{十二}〕紫者灰指物曾海石榴市之、八十街爾、相兒哉、誰

〔萬葉集略解^{十二}下^{十二}〕紫は海石榴の灰のあくをさして染る物なるによりて、つば市といはん序

とせり、

〔古今要覽稿^{草木}〕つばき ○海石榴
○中略

藥方雜記に、日本山茶花の名目を載て、白玉、唐笠、白妙、高根、白菊、六角、加賀牡丹、渡守、春日野、有川、朝

露、亂拍子、薄衣、大江、山三國、玉簾、浦山、開荒、浪鳴戸、金水引等の號ありと、本草綱目啓蒙見へたり、いはゆる

唐笠、白菊、春日野、加州、有川、亂拍子、薄衣、玉簾、荒浪、鳴戸、金水引等の名目は、詳に増補地錦抄に載せ

たれば、古のみならず、近世もまた我邦よりして此種を西土には傳へしなり、此實の油を今の俗

には木の實の油といひ、其一名を周防にてはかたし、油長門にてはかたあし、肥前にてはかた

しの油といふ、此油は男女にかぎらず、髪にねばりて櫛の齒の通らざるに少し灌げば、よくさば

けて梳けつり易く、又土にそ、げば、よく蟲を殺すと、同上云り、今江都にて鬻ぐものは、多く伊豆の

八丈島より來る、至て上品にして、あげもの、料に用ゆる、胡麻、樞等の諸油にまされり、又此樹を

燒て灰となしたるを、俗に山灰といふ、此灰は古より紫をそむる料に入る、故に、萬葉集に、紫者

灰指物曾海石榴之とよみたり、今あるものはすべて丹波國山邊郡の内より來るといふ、國史木昆蟲